

童謡ものがたり

幼年ニコピン

葛原しげる

今は昔、大正の初期、童謡のことが文芸の上から重要視されるようになる十年ほど前、すなわち明治の末期、児童雑誌『小学生』のち『幼年世界』また『少年世界』などに、毎号、作曲を得ては、幼児向きの唱歌を（いまだ「童謡」といわないで）連載し続けていた私は、別のことから作曲者弘田竜太郎氏に求めた。弘田氏、それは、か

つての児童唱歌の代表ともいふべき『鳩ポッポ』に代って、一世を風びしたかにみえた「お手でつないで」（靴が鳴る）の作曲者、に求めた。それは、童謡の作曲でなくして『ピアノの教則本』の新作曲を――。

その頃、私は元来、琴・三味線の音をきいて大きくなって、すこぶる音楽好きであったので、ピアノの稽古を『教則本』で始めたところ、左手右手の使駆の不如意もさることながら、その曲趣が、邦楽に馴れた私の耳には、どうも快よくない。しっくりしないので、

「日本人向きに、ピアノの手ほどきの曲を作ってくれ」

と、せがんだ。

「もっと、コードモにもよくわかるピアノ曲を、作曲してくれ」

と頼んだ。その数年前、今の芸大、当時の東京音楽学校のピアノ科を、優等卒業して、令名をうたわれている新進ピアニスト、ミスターヒロタに、

「日本人には、日本人向きの曲があるはずだ。日本のコードモ向きのピアノ教則本は、きつと、世に歓迎されるに相違ないから――」

と、おおいに勧めた。

「よし、やってみよう」

と二つ返事に、きつと、共鳴してくれるであらうとの予期に反して、言下に

「ソナナの、嫌だよ」

と、極めてアッサリしている。その理由に曰く、

「コードモの曲なんか、作りたくないんだ。

オペラをこそ作りたいんで……」

とのこと。コードモ党の私は、いざさか、侮辱を感じて憤慨して、いろいろの理由を並べて、再三再四求め、せがみ、頼み、勧めたが、どうしても「よし」といつてくれぬので、その夜はそれで引下ったが、

「コードモの曲なんか」

といわれたことがくやくしくて、重ねて翌々日、改めて訪問、

「日本の将来のため、どうしても、コードモの為によい曲が生れなくては——」と力説これとめたところ、さすがの同氏も、

「そんなに言うなら、ピアノの教則本でなく、コードモの歌を、作曲しよう。ついで、君が、いつもいつている「ニコニコピンピン」ということばは、かねて面白いと思っているから、あのことばのはいっている歌を作ってくれよ。その作曲なら、やってみるよ」

とのこと。私は、帰宅早速作詞にとりかかって、まとめたのが『ニコニコピンピンのうた』である。二節の童謡で、第一節に、太陽を、第二節に、風をうたって、各節の終を、

それぞれ ニコニコ ピンピンよ

ニコニコ ピンピン ニコピンピン

で結んだ。ちと長いので、幼児向きではないが、弘田氏の曲は、たいへん軽快で、楽しくて、伴奏も、非常に歯切れがよく

て、非常に勇しくて、まことに、コードモ向きにまとまった。それを、同じ東京の本郷区も、弥生町と西片町と隣合せに住んでいたので、「出来たから、今すぐ行く。門の戸を開けといて——」と電話をかけてよこしておいて、あたふた駆け込むように玄関を上るや、応接間に入り込むなり、ピアノを弾きひき、自ら声をはり上げて歌って、歌い終るや、一オクターブ高い一音を、ボンと軽くたたいて、腰かけていた廻転椅子を、クルリと廻して、後に立ってきいていた私の下腹を、一つポントたたいて、「ニコニコピンピンニコピンピン、どうだい」と、いかにもうれしそうであった笑顔が三十余年後の今でも、まざまざと目前に見る心地がする。

「いいよ。面白いよ」

と、私も大よろこび。改めて前奏曲から弾き直して、声高く歌っては

「ニコニコ ピンピンニコピンピン

いいだろう。面白いだろう」

と、きわめて楽しく、私もすぐ覚えて、何回も何回も歌い合って喜んだ。そして、二、三のコードモ会で試演して好評を得た。神田の神保町にあった上方屋からは、極彩色の三枚セットの絵葉書にして発売した。当時、童画界の第一人者であった岡本帰一画伯入念の揮毫にかかり、印刷も十二度刷を重ねた美しい豪華絵葉書。ついで東光閣書店からは、同画伯の装幀になる童謡曲『ニコニコピンピンのうた』を出版した。当時「唱歌遊戯」という名で、その歌曲に振付をしたのが卯牧季雄氏で、方々で踊らせたりましたので、広く世に知られたと思う。のち、麻布三河台小学校から、大久保百人町小学校に転任した時高庸純氏は、自ら、「ニコピンコードモ会」を主宰して、NHKが愛宕山に移る前の芝浦時代から、さかんに、この歌曲を中心に新作童謡を放送した。

かくて弘田氏は、コードモの為の作曲に深甚の関心をもつようになって、次々に多く

の名作をものして、コードモ界を楽しいものにしてくれたのである。氏自ら、いつか放送で回顧して、「童謡の作曲については、葛原に叱られた」と述べたとか。私は、叱るところか、おおいに求め、頼み、せがみ、勧めたのであった。そして、日本の童謡界に、もし「お手をつないで」が無かったら——すなわち弘田氏が、コードモ曲に手を出さなかったら——日本のコードモ界は、どんなにつまらないことであつたらうという向きがある。その点において私は、よいことをした」と内心、たいへんうれしい。ピアノの教則本は、バイエルの、あれでよいとして、歌唱する「コードモのうた」すなわち童謡は、弘田氏らによって、多くの不滅の名作を遺されて、今のコードモも楽しい。

ところで、この『ニコニコピンピンのうた』は、少し長くて、詩としてもまざくて、少なくとも、現代の幼児向きでないの
で、「何とかしようよ」と、弘田氏ともときどき話し合うこと多年ののち、昭和十八年、私どもの「作歌者協会」の有志が、その後の童謡界が、感傷本位のもの洪水から、多少救われて、快活なものが多くはなつたが、追々に品の悪いものが多くなつたのに慨して、新作を世に問うことになつたので、いち早く、「幼年ニコピン」と、窮余の名をつけて、ものしたのが、

一、オ日サマ キラキラ (ヨイテンキ)

カゼハ ソヨソヨ (ヨイキモチ)

ミンナ ミンナ ピンピン

ニコニコピンピン

二、コトリハ ビイビイ (ウタツテル)

オハナハ ヒラヒラ (オドッテル)

ミンナ ミンナ ニコニコ

ニコニコピンピン

で、曲は同じ弘田氏。

ちなみに、右の()の中の句は省い

て、その感じを簡奏曲で出しては、と注文したことであったが、実際はどうなつたのであつたか、今、現物が手もなくなつてもとない。由来、何の歌詞も曲も、ことに振付も、あまり如実に、描写し尽しては味がないのではあるが、幼児にはかなりの説明を必要とすることはいうまでもない。

これは、他の諸氏の新作とともに単行本『ウクトオドリノホン』に収められたが、大戦も後半期の頃で、日本の現状がおよそ、児童文化とは縁遠くなりつつあつた頃なので、二十年前、絵葉書まで発行されたような普及はみられなかつた。しかし、一時、童謡界を風びしたセンチメンタルなものは、幸にして影をひそめて年あけ、ニコビニズムを童謡の世界にも求め、折り続けた私の今一つの歓喜満足は、家庭音楽としての筆曲に、宮城道雄氏の作曲で、多くのコードモ向きの、手ほどの曲を提供し得たことである。

由来、邦楽の中でも筆曲には、古来手は

どきの曲があるにはあったが、いわゆる童謡気分ものがほとんど無かったので、大正六年、朝鮮から初上京の同氏と、私の第一の仕事は、箏曲童謡の創作であった。大正八年六月十五日、東京本郷の中央会堂での第一回発表会以来、約百曲の箏曲童謡が、宮城氏の創作によって、生田流以外の諸派諸流の箏曲界でも歎び演奏されて、コードモを、おとなまでをも歎ばせていることを私は大満足に思うと同時に、今更に同氏の急逝が、弘田氏の病歿とともに、惜しくて惜しくてたまらないのである。

既述の、かつての童謡界に、大きな存在であった感傷本位の作品が、コードモをスポイルすることを、いたく頭痛の種とした私たちは、あくまでコードモ向きに、明朗に、円満に、しかも進取的に、健康な童謡をと、同志のものと『日本童謡社』を興し、『日本童謡』を月刊し、別に「ポッポの会」を神田の教育会館の講堂で隔月開催して、当時

の、お茶の水幼稚園の倉橋惣三氏、女高師付小の堀七蔵氏はじめ、児童文化各界の第一人者の出演を乞うて、いわゆるニコピン主義のコードモ会を提供した。その頃、西条八十氏の名作「お菓子の家」が発表されたのをみると、その結句が、

「ここに とまって よいものは
ふたおやのない コドモだけ」

であるのに驚いて、私は、何かで、これは困る、と発表したことがあるのを、同氏もよく覚えておられて、先年、私の童謡詩集『雀よこい』の序文で、

「この謡に対して、葛原さんは、最後の二行が気に入らぬ。これでは、両親のあるコードモが読むと淋しい気持になる。すなわち、一般のコードモの謡としては、ふざわしくない」

という意味のことを言われた。
お互に若い頃だったし……微妙なわれらの立場の相違があった。当時の葛原さんは、私にとっては詩を解さぬ頑冥な教育唱

歌の論客だった。

だが、やがてわれら詩人たちも、永い間童謡を書いているうちに、次第に児童の現実の生活に親昵し、童謡を書きながらも、かれらへの心理の影響を、よりふかく考えるようになった。葛原氏の憂慮の原因も、うなずけるようになった。北原白秋が、各種の雲の名称や文字を、容易に覚えさせるような謡を書き出したのも、詩人に、この教育者の自覚が深まってきたためだったと思う。(下略)

と書かれたのも私は、うれしい。

さるとても、今の幼児は幸福である。童謡だけでもよいのをふんだんに、教えられて、聞かされて、よく成長しつつある。
ときどき、私自ら思う。生れ変って、今の世に幼児として大きくしてもらえたら……と、心の底から、しみじみ、そう思う。
(昭和三三、五、九。備後、八尋の里にて)